

高尾山 歴史の散歩道

56

明治大学博物館

外山

徹

奥之院



現在とは奥之院への登り口が異なる(国立国会図書館蔵「八王子名勝志」から)

壮麗な飯縄権現堂(かつては飯縄権現社の右手に回りこみ、幣殿及び本殿との連結部を眺めつつ先へ進むと、奥に急な石段がある。息をきらせつつ登りきると、そこには奥之院不動堂がある。

奥之院不動堂

この堂は、明治三四年(一九〇二)に建立された大本堂の位置に大日堂(現在の大師堂)、業師堂(後に大光寺本堂、現存せず)とともに並んでいた旧護摩堂を移築したものである。江戸前期、寛永年間(一六二四〜四四)における伽藍再興時の建築で、同時期の大師堂・仁王門に後世の修築の手がかなり入っているのに対し、古式の様式を留める貴重な遺構である。護摩堂改め現在は不動堂であるが、神仏習合の霊山においては習合神を祀る社殿とともに本地仏を祀る本地堂のあるケースが多い。寛延の

縁起では、中興俊源の夢中であつて不動明王が「諸魔まことに繁く、いたずらになす。余、震雷して馮しまさにこれを降伏す。故にこの奇変を現す」として飯縄大権現の姿に示現したことを述べている。現在、まさに本地堂にあたるのがこの堂といふことになる。

この奥之院不動堂に安置されている不動尊像は狩野羅、制吒迦の二童子を従えた立像で、像高二・九センチ、高尾山内の不動尊像としては最も大きく鎌倉時代の作と評価されている。俊源の中興よりも年代的に遡る荒廃期の造立であり、どのような来歴を辿つて高尾山に祀られるようになったかが気になる。庶民による寺社信仰が隆盛を迎えた江戸時代において、前回も触れたように、江戸の人々の間で不動の人氣は特に高かつた。火事と喧嘩は江戸の華と言ひ、被災による復興がその発展の

奥之院の変遷

それでは、江戸期の地誌・紀行文の記述から、旧護摩堂移設以前の様子を探つてみたい。文政二〇年(一八二七)の「高尾山石老山記」には、左りの方に急なる坂上、上り口垣を結び錠を閉めたり、是を奥の院と言ふ、常に上るを

ゆるさず

とある。登るを許さずとはどういうことか?その翌年の『多波の土産』の著者は、

また左りに奥ノ院道二町ばかり登る、浅間・飯縄・小社三社有り、いとおそろしき深山の景あり

と、ここでは社前まで到達しているので、普段から立ち入りを制限していたわけではなく前者は何らかの事情で通行止めとなつていたのである。

徳川幕府の官撰地誌『新編武蔵風土記稿』(一八三二)には詳細な記事が載る。

奥院三社

奥院は社地後背の山なり。末社弁天と稲荷との二社の間に坂あり。これを奥院坂と呼ぶ。坂口より四、五十間登りて社地あり。平坦の処はわずかに十六坪ほど。矢来を設く。四辺は松杉鬱鬱としていものすこし。

奥之院への登り口は、前記二冊の紀行文とも(飯縄権現社に向かつて)「左り」としているが、当時の弁天と稲荷の間ということになると、現在の天狗社の背後の斜面となり、現在とは異なつた道筋である。道法は他の文献にも半町とあり、「多波の土産」の二町は少々遠すぎる。現状から推し量つても、急な斜面の細い道を登つたであろうから、それ程の距離を感じたのかも知れない。また、この付近は、後の明治一九年(一八八六)に崩落した箇所でもあり、「高尾山石老山記」にある通行止めは道の崩落による可能性がある。何れにしろ、狭隘な土地に鬱々と樹木の繁る奥之院の名称にふさわしい場所だつたようだ。

奥之院への登り口は、前記二冊の紀行文とも(飯縄権現社に向かつて)「左り」としているが、当時の弁天と稲荷の間ということになると、現在の天狗社の背後の斜面となり、現在とは異なつた道筋である。道法は他の文献にも半町とあり、「多波の土産」の二町は少々遠すぎる。現状から推し量つても、急な斜面の細い道を登つたであろうから、それ程の距離を感じたのかも知れない。また、この付近は、後の明治一九年(一八八六)に崩落した箇所でもあり、「高尾山石老山記」にある通行止めは道の崩落による可能性がある。何れにしろ、狭隘な土地に鬱々と樹木の繁る奥之院の名称にふさわしい場所だつたようだ。

高尾山の天狗信仰

大天狗小天狗社が出てきたところで、「言天狗信仰について触れておきたい。本地堂の脇にこの社があるのは、飯縄大権現の脇侍として大天狗・小天狗が描かれているのと構図を同じくしている。しかし、こと文献史学の立場からすると天狗信仰に関する歴史の痕跡は皆

無であり、全くお手上げと言つてよい。各地の天狗信仰が修験道に関わるものと認識されてきたことは、造形的に天狗が山伏の衣装をまとつていふことにも表れている。江戸期以前における高尾山と修験道との関わりも今一つ詳らかではないが、修験当山派の本拠醍醐寺との本末関係があり、また、江戸中期に修験と関わる飯縄大権現の祭祀がクローズアツプされると、傍目からも修験の山というイメージが出来上がったであろう。現在イメージされる天狗の造型はお面にあるような赤ら顔に高い鼻だが、学説からすると、元来は「鳥天狗」と称される嘴を備えた面貌である。インドの神ガルーダなどが起源と言われるが、それはまさしく「鳥がモチーフである。向天狗とも背に翼を負つているが、その意味では「鳥天狗」に造型の正当性はある。飯縄大権現の御影は何と言つても

鋭いくちばしと背に負つた翼という迦楼羅天の造型が印象深く、それが天狗信仰の二つの源流である。それからもう一つ、茨城県稲敷市の阿波大杉神社を中心とする利根川流域におけるアンバ大杉信仰との相似性である。アンバ大杉と高尾山との因果関係は定かではないが、大杉神の御影は飯縄大権現とウリ二つと言つてよい。また、アンバ大杉信仰においても天狗を神の化身としていた。高尾山と言えど大杉の並木である。天に聳える神の依代と見做されてきた、この神性を帯びる樹木と、やはり鳥の造形が結びつくところに天狗信仰の発生する契機があつたのではないだろうか。

おことわり

史料の引用については、読みやすく原文に手を加え、適宜読み仮名を付しています。《参考文献》神奈川県立博物館「天狗推参」(二〇一〇)